

IRICE PLAZA

第7号

もくじ

IRICE PLAZA 第7号発刊によせて	4
IRICE PLAZA 第7号発刊によせて	6
第1部 IRICE講演会	
脳波を用いた認知に関する実験言語学的研究	9
城生 佰太郎	
第2部 月例研究会発表論文	
◆ 英文学	
(1) 英詩のアイデンティティ	34
笠原 順路	
◆ 早期英語教育	
(2) Reading Instructional Models for Beginners: The Effects of Systematic Phonics and Whole Language	41
下 薫	
◆ 翻訳論	
(3) 訳せないもの	
—Traduttore, traditore—	55
岩瀬 孝雄	
◆ 英語音声学	
(4) イギリス英語のイントネーションの形態—O'Connor and Arnold(1973)をデータとして—	63
湯澤 伸夫	
◆ TOEIC 関連	
(5) The Role of TOEIC in Learning English	72
Mark Melichar	

英詩のアイデンティティ

笠原 順路

◆ コミュニケーション関連	
(6) コミュニケーションと英文法	77 岡田伸夫
(7) Communicative Language Teaching 理論の発展過程と課題	85 木塚雅貴
(8) An Approach to Teaching Intercultural Communication	95 村松美映子
(9) 談話展開に関する一考察 — 社会言語学的観点からの日英比較 —	102 渡邊真由美
(10) コミュニケーション能力 — 言語学から教育学へ —	109 今井幸弘
◆ 指導法関連	
(1) 内容理解のための音読指導： A L T との見解の相違を越えて	117 卯城祐司
(2) ヴィトゲンシュタイン：言語と教育 — 意味と出来事の記述純化 —	126 久部和彦
(3) 学習者の疑問から見出す英文法指導の原点 — 実験的発見の観点から —	135 石崎貴士
(4) Catherine Macklon on the Role of English Teachers in Japan	144 岩瀬孝雄
IRICE 年間報告	148

(表紙イラスト／平田 照代)

まず、今日のこの会で話しをずる機会をお与え下さいました島岡丘先生に厚く御礼申し上げます。さて、ここには、英語学や英語教育を専門にしてこられた方々が大勢いらっしゃると伺っていますので、前半部では、そうした皆さんにも詩を好きになってもらえるよう、取えてよく知られている作品 (Keats と Gray) を選び、それらの冒頭の一節をもっぱら語学的側面から読もうと考えています。その際、いわゆる伝統的な英文科の英詩の講義で聞かれるような話しは極力避けるつもりです。Keats の場合は prosody と意味のつながりを、Gray の場合は専ら語の意味と collocation のことを話し、そうした内容が散文ではなく、韻文でしか表現できないことを述べ、そこに英詩の identity があるのだ、と主張したいと考えております。作者の伝記や思想的背景などについては意図的に触れません。そして、語学的に詩を読むことだけで十分に楽しいのだということを多くの人に分かっていただけだと思います。

話しの後半は、私が現在取り組んでいる研究の最先端の事柄のなから、語学的要素の強い点を取り出し、ある程度まとまりをつけてお話します。扱う作品は、Shelley, "Ozymandias" と Wordsworth, "Michael" です。Shelley の場合は意味と文法構造のつながりのことから始め、それが、作品のテーマとどう関係するかを述べ、Wordsworth の話しでは、一つの単語の解釈を作品全体のテーマとの関わりで論ずる予定です。(本稿では、紙面の都合上 Shelley と Wordsworth の話しは省略する。)

皆さんは、詩というと、とかく文学性ということを中心にお考えになる方が多いと思いますが、そもそも詩には、(言語藝術である以上、当然のこと

このように読むと、lence と and の連続した2個の弱音節が、弱音節1個分の時間で、読まれ、slow という語が、強音節1個と弱音節1個分の時間をかけて、文字どおり「ゆっくり」と読まれることになります。言葉をかえて言えば、意味を考えながらこの行をできるだけ韻文的に読もうとすると、行末で速度が落ち、その行末の語句の意味が一層強調される、ということになります。こうした強調の仕方は、韻律を持っている韻文でしかできません。このように、slow という語を slow に読み、quiet という語を quiet に発音するというのは、それぞれの単語が図像的に iconic に用いられているということになるのですが、この "Ode on a Grecian Urn" という作品自体、語り手が想像上の瓶に語りかけることによって、瓶を実際の図像として言語的に作り上げるという作品だという点を考えますと、冒頭2行が韻律的に図像的機能を果たしているということは、作品のテーマとの関係からしても、非常に重要なことだといえます。

*

*

*

次は、Keats 以上によく知られている、Thomas Gray (1716-71) の *Elegy Written in a Country Churchyard* の冒頭部を見てください。この作品は英米でも有名な詩で、*OED* での総引用数は全部で183例。作品の総行数が128行ですので、平均1行あたり1.4例以上が例文として収録されている計算になります。

The curfew tolls the knell of parting day,

The lowing herd wind slowly o'er the lea,

The plowman homeward plods his weary way,

And leaves the world to darkness and to me. (ll. 1-4)

どの注釈書にも必ず載っているのが、weary way における weary が転移修飾語句 (transferred epithet) だということです。つまり、元来 weary であるのは plowman もしくは、その動作であって、way ではないからで、

weary という修飾語句 (epithet) を本来修飾しない語句に転移して (transfer) 用いているからです。

では、それによってどういう効果が生じているのでしょうか。wind の語義は、*OED* によると、

wind : 7. b. To move along in a sinuous course; to go or travel along, up, down, etc. a path or road which turns this way and that.

とあり、用例に Gray のこの詩行が引用されていますので、間違いないと思います。しかし、同じ wind の項の別項には次のような例があります。(老嫗心ながら一言ご注意申し上げますと、目当ての用例が *OED* の例文のなかにあろうものなら、他の部分には目もくれない人が皆さんの中にいらっしゃるとしたら、それは良いことではありません。とりわけ、近年、*OED* が電子化され、Gray の *Elegy* のように有名な作品になればなるほど、作品名・行数から逆に語義を引くことが可能になってきていますので、なおさらのことご注意下さい。*OED* を引く時には、寄り道をするのが願路だとお考え下さい。)

wind : v' 7. d. with advb. acc., or trans. with obj. (one's or its) way, etc.

1667 Milton P.L. iii. 563 He..windes..his oblique way Amongst innumerable Stars.

1794 Mrs. Radcliffe Myst. *Udolpho* i, A rivulet that..wound its silent way beneath the shades it reflected.

1823 Scott *Quentin D. xxvii*, The mole..winds not..his dark subterraneous path beneath our feet the less certainly.

1857 Livingstone Trav. v. 101 The slow pace at which we wound our way through the colony.

1887 L. Oliphant *Episodes* 281 A funeral procession, winding its solemn way to the cemetery.

1922 A. E. Housman *Last Poems xli*, Content..to wind the measures [= dances].

これは、wind. の副詞的対格 (adverbial accusative) の用法として、way などを目的語にとることがあるという説明ですが、不思議なことに用例中、純粋な one's way という形は、1例 (1857年)しかなく、全6例のうち way を副詞的対格にしている4例 (1667, 1794, 1857, 1887年)中、3例 (1667, 1794, 1887年)までが特殊な形容詞 (oblique, silent, solemn) を冠しており、path を副詞的対格にする1例 (1823年)も、他の例に劣らず dark と subterraneous という特殊な形容詞を冠しています。つまり、OED のこの項の説明と用例から読み取れることは、wind + one's + adj. + way という表現がかなり一般的だということがわかります。

さて、以上の点を踏まえて、Grayに戻って考えてみますと、weary way は plowman を主語とする動詞 plod の副詞的対格であり、文法的には1行前の wind とは無関係ですが、表現上の慣用からは、wind の縁語とみなしてもよいこととなります。つまり、wind の主語である the lowing herd 牛との関係が生じる可能性が多分にあるということが言えます。これも散文ならば、このように明白な文法的繋がりを以外の関係を認めることは文法違反になるのですが、韻文の読み方はそうではありません。結論を急ぐ前に次の例をご覧ください。

plod の語義です。これも OED に用例があります。

- plod : 1. b. trans. To trudge along, over, or through (a road, etc.); to make (one's way) by plodding.
 1750 Gray Elegy 3 The plowman homeward plods his weary way.
 1816 Byron Ch. Har. iii. iii. The journeying years Plod the last sands of life.
 1896 A. E. Housman Shropshire Lad xvi. Nor plod the winter land to look For willows in the icy brook.
 1903 R. D. Shaw Pauline Epist. 176 In obedience to a dream..Augustus plodded the streets of Rome and gathered coppers as a beggar.

ここで注意しておきたいのは、Gray の用例が初出だということです。初出だということにより、この1-b項にある他動詞としての用法は Gray の当

時としては新しい用法だったということが分かります。すなわち、動詞 plod と、この場合の目的語 weary way との繋がりは、当時としては、あまり強くなかったということです。

ここまでくれば勘のよい方はお分かりだと思いますが、問題の weary way を中心に考えてみますと、本来の動詞 plod との結びつきが弱まった分だけ wind との繋がりが一層強くなったということです。plod との繋がりがより wind との繋がりの方が強いというのは、言いすぎとしても、それと同等くらいの結びつきを作者 Gray 自身は感じていたといえるでしょう。

以上の語学的考察が意味のうえにどう反映するかといえば、疲れているのは、農夫だけではなく、牛もなのだ、ということになります。そこで、農夫も疲れ、牛も疲れ、あたり一面に疲れた雰囲気は漂っているとすれば、weary が修飾している道 way までもが疲れている、と表現/解釈しても、あながちゆきすぎた表現/解釈とはいえないかもしれません。

こう考えてくると、転移修飾語句の説明の時に本来 way は weary ではないとした前提そのものが散文的 prosaic に、つまり味気なく思えてきませんでしょうか。もし、皆さんのなかにそうお感じの方がいらっしゃれば、そういう方は、十分に韻文を楽しむだけの素養と資格がおありです。

(後略)

(東京大学)